

2024年9月1日 スチュワードシップ月間①

説教題「主イエスの恵みを生きる」ローマ信徒への手紙 6章 1～11節

主任牧師 加藤 誠

「わたしたちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることになると信じます。」(ローマ6章8節)

九月の5回の主日を通して「スチュワードシップ」について聖書から聴いていきましょう。英語「スチュワード」の原意は「管理人」であり、「主人の財産」を「主人の意思にそって忠実に管理する人」です。新約聖書では「神の恵みの管理人」という意味で用いられています(例：第一ペトロ4・10)。私たちは神から「さまざまな恵み」をいただいています、その恵みを「わたしが好きなように使う」のではなく、「神の恵みとして、神の意志にふさわしく、神が喜ばれるように用いる」。それが「スチュワード」の仕事であり、「スチュワードシップ(心得)」なのです。

日本のミュージカルを牽引してきた井上芳雄さんは福岡の鳥飼バプテスト教会で育ち、結婚を機にバプテスマを受けられた方ですが、『信徒の友』のインタビューで次のように語られています。「ミュージカルは自分を通して表現する仕事なので『我が我が』としたほうが舞台上では目立つことができます。でも自分のことだけで歌っていると本当の意味ではなかなか上手いかず、長く続けることも難しい。バプテスマを受ける前、これでは限界があるようにも感じていました。その頃、J・キムさんというクリスチャンのミュージカル俳優と出会い、こう言われました。『あなたは今自分のために表現しているけれど、神さまのために表現したらもっと素晴らしいパフォーマーになりますよ』。それ以来、本番前に舞台袖で『神さまに委ねてささげます』と必ず祈っています」と。自分にスポットライトが当たるためのパフォーマンスではなく、神さまにささげる奉仕、神さまの恵みを指し示す奉仕として祈って委ねていく。これは俳優という仕事に限らず、クリスチャン皆が常に大切にしたい「心得」です。

イエス・キリストは「神のスチュワード」として生きる喜びを私たちに教えてくださいました。主イエスは十字架の最期まで「神のスチュワード」として誠実に歩み通されました。その公生涯のはじめに主イエスは荒れ野で悪魔の誘惑を受けます。主イエスは「奇跡を起こす力」をはじめ「悲しみに寄り添う心」「教える力」「優れたリーダーシップ」など素晴らしい賜物を神から受けていましたが、悪魔は主イエスにささやくのです。「その豊かな才能を、君自身のお腹を満たすため、人びとからの称賛を得るため、金を儲けるために使えばいい！」と。しかし主イエスはその誘惑をはっきり断ります。「奇跡を起こす力を自分のお腹のためには用いない。神の御言葉に仕えるために用いる。自分がスポットライトを浴びる道ではなく、神の栄光をあらわす道を歩む。そしてこの世の富と力にひれ伏すのではなく、神にのみひれ伏し従う」と。

クリスチャンは、この主イエスに従って生きる者です。主イエスが「神のステュワード」として生きられたように、私たちが「神のステュワード」として、神からいただく恵みを、自分のお腹を満たすためだけではなく、神が喜ばれる働きのためにささげていく歩みに招かれているのです。

今朝、私たちはローマ 6 章の使徒パウロの言葉を読みました。パウロはクリスチャンの命を「古い自分に死んで新しい命を生きる」「肉において死んで、キリストと共に復活の命に生かされる」と語ります。クリスチャンの歩みは「新しい命」を生きる、「復活の命」に生かされる、うれしい道です。私たちは主イエスと共に、この世界を賛美して生きるよう招かれているのです。そこで大切なことは「死ぬ」ことだとパウロは語ります。「死ぬ」とは「自分はこういきたい、こうありたい」という「我を捨てる」ことであり、「自分を神に委ね、神の目的に向けてささげていく」ことです。「自分の罪（非、限界、弱さ）」を認めて「十字架のキリストの恵み」を感謝して受けて生きることです。ただ、この「自分に死ぬ」ということがとても難しいのです。私たちはどうしても「他人よりも自分がかわいい」「他人の喜びよりも自分の喜びを優先したい」「負けたくない」「ほめられたい」という「自分が、自分が」の思いがほんとうに根強いので、なかなか「捨てられ」ない。でも、主イエスもそのように自分の中に芽生えてくる「誘惑」に「超然」としておられたわけではなく、いつも悩み戦われたのでした。それが荒れ野の誘惑です。その主イエスに悪魔の「誘惑」に立ち向かう力を与えたのは御言葉でした。自分の中に湧きおこる「ささやき」と御言葉で向かい合われた。そして祈られた。祈るとは、自分の力で成し遂げようとするのではなく、聖霊の働きと助け、聖霊の注ぎを求めるといことです。自分の弱さを認めて、神さまの力、神さまの励まし、慰め、導きを求めていくことです。

ただしそれは決して「禁欲主義」に生きることではありません。「誘惑」をさけるためにこの世の生活から距離を取って、礼拝堂でずっと過ごすことではありません。主イエスは「神さまの前にひとりになる時間」を大切にされましたが、同時に「人々との交わり」を大切にされ、町の中に出ていかれました。なぜなら「自分ひとりだけが神の国の幸いを味わう生き方」ではなく、「皆と、世界中の人たちと神の国の幸いを味わい、皆と一緒に神さまを礼拝して生きる道」を求められたからです。

ハワード・ブレアという牧師がこう問いかけておられます。人生には三つの大切な問いがある。「何に（誰に）仕えるのか」「どのように仕えるのか」そして「誰と共に仕えるのか」。主イエスは、真実な愛なる神に仕えて、与えられた賜物を神にささげて、多くの人々と一緒に神さまに仕えていく道を生きられました。この主イエスが歩まれた道は喜びと賛美あふれる道です。日々、聖書から主イエスの恵みを受け取りながら、この主イエスに従っていきましょう。